



学生数/約4200人  
学部/経営、情報マネジメント  
大学院/総合マネジメント研究科

狙い

- ▶ 自学の特色であるPBL型授業でコアとなるリテラシー、コンピテンシーを兼ね備えた学生の獲得
- ▶ 高校の探究学習の成果を大学教育につなげる

高校	入試	入学前教育	大学教育
高校の探究学習を支援 ・『主体的学習者育成プログラム』 『協働的学習者育成プログラム』の開発 ・高校教員を対象にアクティブフォーラム・授業力向上セミナーを開催	*経営学部の例 <b>総合型選抜</b> キャリア教育接続方式 AO(アドミッションズ・オフィス)方式 AL(アクティブラーニング)方式  <b>一般選抜</b> 一般選抜方式 (前期スタンダード・前期プラスワン・前期2教科ベーシック・中期・後期) 国公立大学併願方式 未来構想方式 共通テスト利用方式 (4教科型、3教科型)	・一般選抜を含む全ての入学予定者に対して、「入学前学習支援プログラム」*を実施  *2日間にわたって自分のキャリアを考え、大学での学生生活、学修について考えるきっかけづくりをする	<b>【経営学部】</b> ・初年次PBL 「石垣市と連携した地域創生プロジェクト」 ・超実践型PBL 「マーケティング・イニシアティブ」 (2022年開講予定)  <b>【情報マネジメント学部】</b> ・産学連携PBL 「地域創生サステナブルプロジェクト」

注目!

入学者の期待を裏切らないために実践的なPBLを拡充

産業能率大学は意欲的な入学者の増加に対応すべく入学予定者全員に入学前教育を実施するほか、PBLの拡充にも力を入れている。「入試で新たなハードルを課すのであれば、同時に入学者が「自分が大学でやりたかったのは、まさにこういうことだ」と感じられる教育プログラムを用意すべきだ」(林部長)という考えからだ。湘南キャンパスの情報マネジメント学部は、本年度から「地域創生サステナブルプロジェクト」を開始させた。地元の湘南オーリーブを学修素材にアグリビジネスや休耕地の活用、フードロスなど、湘南地域の現実の課題解決を探る授業だ。一方、経営学部は全1年生対象の初年次PBLを開講している。2016年から石垣市と連携した地域創生プロジェクトを展開しており、本年度は「観光客誘致とサンゴ礁保護の両立」をテーマにした授業に取り組む。次年度からは超実践型PBL「マーケティング・イニシアティブ」も始める。高校の探究学習の進化版ともいえるべきもので、関心のある企業や組織を自由に選択し、自ら課題を設定。その解決に向けた施策づくりに挑戦する。



▲石垣市との地域創生プロジェクトのキックオフ授業。  
 ▲「地域創生サステナブルプロジェクト」の様子

産業能率大学

CASE STUDY

探究と接続する一般選抜でコンピテンシーを評価

「一般選抜でも社会課題に対する姿勢や意欲を重視。試験にスマホを持ち込んで検索しても構わない」。このような挑戦的な入試にける思いを、発案者の入試企画部長に聞いた。



入試企画部長  
林 巧樹

はやしこうき ●1997年より入試センターにて勤務。年間350校以上の高校を訪問するほか、98年にAO入試、2007年にキャリア教育接続入試、2013年にAL(アクティブラーニング)入試の開設等に携わる。「高校生のためのキャリア開発プログラム」なども開催。

一般選抜で課題発見・解決力を見る

本学は2021年度入試から、意欲や主体性をレポートで測る一般選抜「未来構想方式」を始めました。これは共通テストの得点率5割を出願条件にし、事前記述課題と本試験での未来構想レポートで合否を判定する入試です。高校で探究学習や課外活動に熱中した経験を持つ生徒をターゲットにしています。

本学はかねてより企業と連携したPBLを盛んに実施しています。そのノウハウを基に、高校向けに探究学習支援のプログラムを提供しています。探究学習は高校教員から学習効果を高く評価する声がある一方、「夢中になると、受験勉強が遅れてしまう」という意見も耳にします。しかし、探究で培った社会課題の発見・解決力

は必ず将来に生きるはずですが、ここで探究は入試、そして大学教育にもつながることを示したいと考え、この入試を発案しました。

本試験で課す未来構想レポートの課題は、2021年度入試では「近未来のある地域の社会状況(シナリオ)を読んで課題を分析し、その解決策をまとめる」というもの。与えられた情報を分析する力、知識の活用力、自分の考えを表現する力などを評価します。正解が一つという問いではないので、事前の対策はあまり意味がありません。換言すれば「中学・高校生活全般で何を経験し、何を考えてきたか」が問われる入試なのです。

「主体性や意欲(コンピテンシー)の高い学生は総合型選抜で取ればよいのではないか」という意見もあります。あえて一般で実施した理由は、探究学習に夢中になって共通テストで思うように点が取れなかった進学校の生徒の受け皿の入試にしたいからです。それにより、知識・技能(リテラシー)もコンピテンシーも高い学生が増えれば、従来型の一般選抜や他の入試方式で入学した学生の刺激になり、学びの活性化も期待できます。実際、2007年から始めた「キャリア教育接続方式」で入学した学生は、ゼミやPBLで活躍

し、本学の中核的な人材として育っているという実績があります。

受験生の自己肯定感を入試で高める

入試初年度の入学者の中には、偏差値が高い併願大に合格していたにもかかわらず、本学を選んだ者がいました。理由は、「入試で自分の18年間の経験と考えを評価してくれたから」でした。この入試自体が受験生の自己肯定感を高め、意欲を向上させる機会にもなっているようです。

前例のない入試は、受験生や高校教員に認知されるまで辛抱が必要でした。前出の「キャリア教育接続入試」は、本当に取りたい学生が取れるようになるまで4、5年かかりました。ただし、先行して新しい入試を行うと、高校にそのイメージを持つてもらえるようになります。ですから、新課程入試についても、今から動き出し始めても遅くないと思います。早過ぎるということはありません。「産業能率大学には、本気で探究に取り組んだ高校生向けの大学だ」ということを、入試と探究の支援等の機会を通じて高校に積極的に伝えていきたいと思っています。

\* 同大学の総合型選抜の1つ。「自己のキャリア構想」を試験の場で紹介し、大学が育てたいと考える人材との適合度合いを測ろうとする入試。

取材・文/本間学 撮影/荒川潤